

スキルアップを目指して 2年目の挑戦！！

PDCAサイクルを回して活かして優しい介護を

常照苑くすのき通り

ノーリフティングケア1年目の変化

- ・シート携帯が常態化
- ・福祉用具の活用



身体的負担の軽減

- ・就業前の体操定着
- ・身体の使い方、体重移動の動作の揭示



腰痛の軽減

〈成果として〉

職員のノーリフティングケアへの意識付けができた

常照苑くすのき通り



【特徴】

- ・筑後地区南部のみやま市 ・ユニット型の特養 ・定員:30名
- ・平均介護度:3.5 ・平均年齢:93歳
- ・介護職員数:20名(内EPA職員3名)
- ・職員平均年齢:42.2歳

【基本理念】

「私達は、入居者様に自分の親や
自分自身が提供されたいと思うサービスを行います」

1年間取り組んで出てきた課題

課題 : PDCAサイクルを活用できていない!!

- ・PDCAサイクルの周知、理解が不足している
- ・計画を実行し評価を行うが、見直し・改善が行えていない



会議の議題に上がるが解決できていない課題がいくつかある

対策: PDCAサイクルの周知

【PDCAサイクルが何か周知、理解してもらう】

- マンツーマンでの伝達講習
- ・パワーポイントを使用する
- ・EPA職員には分かりやすい日本語で説明し、表情も見ながら行う



具体的な事例1

令和3年1月時点
での移乗方法

- ・101歳・男性・介護度3・身長140cm・体重52kg
- ・両膝関節屈曲(約100度)拘縮あり(触れるだけで痛みの訴えあり)
- ・認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅲa

PLAN

スライディングボードとリフトを併用する。
以前よりスライディングボードを使用しており、リフト購入後に併用して使うようになった。

DO

リフトを使用できる職員がコアメンバーに限られ、他の職員はスライディングボードを使用していた。(併用状態)

CHECK

スライディングボード使用にて移乗を行う際、
移乗時の怪我、皮膚剥離が発生!!



5

PDCAサイクルの伝達・周知終了後

〈職員の共通認識〉

このままスライディングボードでの移乗を続ければ怪我のリスクが大きく、いつか大きな事故につながるかも

ACT

1, どうすればよいか見直し・改善策の会議を行う

- ・職員から意見を聞く

リフト使用時の怪我の発生は0
スライディングボードを使用するよりリフトの方が楽
リフトの操作に自信がないためいつもスライディングボードを使用してしまう

などの声が聞かれる

- ・ノーリフティングケア推進委員を中心に課長、入居者担当者、看護師にて改善策の会議を行う
- ・会議後にフロアミーティングをし、周知を行う

PLAN②

移乗方法をリフトへの一本化に変更することに決定!!

7

CHECK (介護者の要因)

- ・リフトを操作できる職員が20名中5名(コアメンバー)だった。
- ・リフトを操作できない職員はスライディングボード移乗に限られていた。
- ・ボードの技術チェックから数カ月経過しており自己流の介助方法になっていた。
- ・「抱えない介護」を優先し、不十分な技術でボードでの移乗をする職員がいることがわかった。

CHECK (被介護者の要因)

スライディングボード使用にて移乗を行う際、足を後ろに引かれ車椅子のフレームに干渉していた。

スライディングボードの使い方の指導が不十分だった。
自己流の使い方になり、正しく使用出来ていなかった。
再指導が出来ていなかったができていなかった。

6

DO②

リフトへの一本化するために.....

2, リフトの操作方法の指導

- ・リフトの操作に自信がないとの声が聞かれたためリフトの操作方法をマンツーマンでの指導から始める
- ・EPA職員には「やさしい日本語」を意識して実際に操作しながら指導を行う



3, リフトへの移行開始

- ・職員2名にて操作方法を確認しながらリフトでの移乗介助を行うように徹底する
- ・定期的にラウンドを行い、リフトを使用しているか確認を行う



8

4, CHECK②

- ・実行後、移乗時の痛みの訴え少なくなった
- ・職員からも中腰姿勢をとることなく、「楽になった」との声あり
- ・2名にて介助を行うので、二重チェックが出来て安心して行える

5, ACT②

- ・移乗時はリフト使用を継続
- ・機械操作のため、今後も安全確認を行いながら2名にて介助を行う
- ・定期的にラウンドを行う事でリフト使用の意識を徹底する

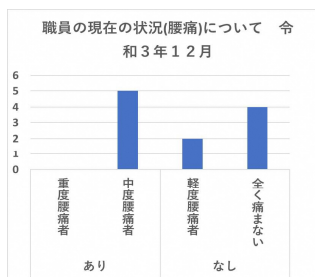
2年目での成果

- ・PDCAサイクルの中で、実施評価の部分で
ノーリフティングケア推進委員も一緒に話し合いの中に入ることで、見直し・改善策を導き出して、再プランニングしサイクルを回していけるようになった
- ・定期的なラウンドを行うことにより、**早期にリスクの芽に気付くことが出来るようになった**
- ・移乗ボードなどの**技術研修の重要性**を認識し、**職員研修の必要性**をより強く認識できた。

今後の課題

同一敷地内ショートステイ事業所勤務職員の実態

くすのき通りと同一敷地内にショートステイフロアが存在し、課題がある



職員人数 15名
職員平均年齢 49.5歳
中度腰痛者率 約45%

- ・介助技術の教育が不十分
- ・くすのき通りに比べ中度腰痛者の割合が多い
- ・浴室を共有しており、一緒に介助を行う際に、意識レベルからのギャップを埋める必要がある。

令和4年度はくすのき通りだけでなくショートステイフロアにもノーリフティングケアを定着させていく必要がある

最後に

目標

- ・全フロアに、「ノーリフティングケア」を定着させる。
- ・月に一度ラウンドを行い、自己流のケアになるのを防ぐ。
- ・「重度腰痛者ゼロの継続」と「中・軽度腰痛者を15%以下」

すべての人(入居者様・職員)に優しい環境を作り、自分の親や自分自身が受けたいサービスの提供をしていく！！